

詩編とわたし

井田 泉

2018/07/11 アダマの会

1. 詩編に関心がなかった時期

2. 詩編に関心が起こり始めた時期（協会口語訳）

中学 高校？ 悩みや病気から？

詩編の祈りが自分に響きはじめる。詩編の中に自分の思いを聞くようになる。

大学

3. 詩編に魂の救いを求める 神学生時代（文語祈禱書）

第 77 編～ 「聖書と私の出会い——私の前半生」から

「時折、非常な不安と焦燥感が襲ってきて、じっとしていられなくなる。ある晩、そのような状態にまた襲われたとき、救いを求めて祈禱書（当時は文語）を取り、巻末の詩編を開いて声を出して読み始めた。偶然に開いたのは第 77 編であった。当時の文語で引用する。

「われ声をあげて神によばわん || われ声を神にあげなば聞きたまわん

われ悩みの日に主をたずね、夜わが手をのべてたゆむことなかりき || わが魂は慰めらるるをこばみたり」 77:1-2

激しい悩みするとき、この詩人は慰められるのを拒んだという。そうだった。安易な慰めは助けにならない。そのとき、声を出して詩編 77 編から読み出して、1 時間以上読んだだろうか。読み疲れた。けれども詩編は、神を見失った者にも支えを与えてくれるように感じた。」

※なおこの 77 編は 78 編に続いていき、先祖の時代における神の働きを回想していく。

「私の経験」にはない「他者の神経験」（聖書とキリスト教の歴史における信仰の証言）が私の課題となる。

4. 詩編を頼りにする 神学校教師時代（新共同訳）

出張の途中、聖書を忘れたことに気づき、途中下車して詩編付きの新約聖書を購入する。

詩編を身近に持たないことの不安（恐怖に近いもの）。

詩編が傍らにあることの安心感。わたしを支え守る祈り、わたしの祈りがともにある。

5. ディートリッヒ・ボンヘッファーの言葉から

「詩編——聖書の中の祈禱書」

「詩編の中でキリストが祈っておられる」

6. 愛唱詩編の中から

103:1 【ダビデの詩。】

わたしの魂よ、主をたたえよ。

わたしの内にあるものはこぞって

聖なる御名をたたえよ。

2 わたしの魂よ、主をたたえよ。

主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

3 主はお前の罪をことごとく赦し

病をすべて癒し

4 命を墓から贖い出してくださる。

慈しみと憐れみの冠を授け

5 長らえる限り良いものに満ち足らせ

鷺のような若さを新たにしてくださる。

6 主はすべて虐げられている人のために

恵みの御業と裁きを行われる。

7. 詩編から祈りを学び、祈りを自分の言葉にする（今後）

祈りの種類

- ・感謝
- ・賛美
- ・懺悔
- ・告白
- ・現実の表白
- ・祈願
- ・決意
- ……